

報新事薬

平成26年（毎週1回木曜日発行）昭和33年8月4日 第三種郵便物認可・薬事新報社©

12月25日

第2869号

20【5・ニュース】

薬事新報 No. 2869 (2014)

S MONAセミナー —IC体験研修

協同組合 臨床開発支援ネットワーク（S MONA）は10月19日、日本教育会館でS MONAセミナー「臨床試験（治験）のインフォームドコンセント体験研修」を開催。S MOのCRCを中心に59名が受講した。

講演2題に続いて、模擬患者参加によるロールプレイおよびグループディスカッション・発表が行われた。

中野重行氏（大分大学）は「医療コミュニケーションの視点から見た臨床試験」をテーマに講演。「コミュニケーションとは《シナボルを介した当事者間の相互作用のプロセス》《双方の情報相互に共有しようというプロセス》《言葉ではなくイメージの共有》である。顔の見えない症例ではなく、顔の見える患者（人）を意識することが重要」と述べた。

日比野文代氏（昭和大学病院）は、CRCの視点から医療コミュニケーションについて講演。「CRCにとってコミュニケーションの真の目的は『行動変容』にある。臨床試験を理解してもらい患者さん自身が『意志決定』できるよう促すことと言ひ換えてもいい。被験者の安心・安全を守ることもなる。くすりの作用機序や試験データばかりに関心を示すと患者を見失っ

てしまう。CRCは患者さんの意識に思いを馳せ、関心を持ってほしい。それが良好なコミュニケーションにつながる。さらに臨床試験の質向上にも寄与するはず」と述べた。

グループに分かれ、全員が模擬患者と1対1のロールプレイを体験。模擬患者はそれぞれ経験を積んでおり、性格・設定は7パターン。ロールプレイのあと模擬患者からのフィードバックによって、気がつかなかった会話の傾向を確認した。同意説明文書は2種。参加したCRCから後日、次のような声が寄せられた。

「患者さんの背景や情報をはじめに確認することが大切だと思った。患者さん側の意見を伺えたことで患者さんも話を聞いてもらいたいと思っているのだと感じた」

「患者さんによって様々な質問があり、いかに臨機応変に対応をしていくかCRCの工夫が必要だと思った。患者さんの心を和らげ、患者さんを理解し、患者さんの声に耳を傾けていくことがIC成功につながる」

「社内でICのロールプレイングをすることはあっても、患者さん視点からの意見や見え方でフィードバックをもらえることまではない。自分が相手からどう見られているのか、素直な感想が聞けて良かった。1年以内のキャリアのCRCは皆体験すべき」